

## クレイグ ロバ トソン、カナダ人の元カトリック教徒 : 「受け入れる

:

明:

キリスト教に 入る道を出した、クレイグは友人に 切られ、再び道を 失います。そしてついに、仕事先で一人のムスリムと遭遇します。

目: [事新改宗者ムスリムの逸 男性](#)

より: クレイグ ロバ トソン

日 13 Sep 2010

集日 13 Sep 2010

私は今日に至るまで、ムスリムとの最初の出会いを えています。ある少年が、ユ スハウスに自分の友人を 連れて来たことがありました。名前は忘れてしまったのですが、彼はムスリムの少年でした。私が思い出すことの出来るのは、少年が「何某という友人を 連れて来たよ。彼はムスリムだから、キリスト教徒になる手 いをしてやりたいんだ。」と言っていたことだけです。私はこの14 の子供に、非常に きました。彼は やかで、フレンドリ でした。信じられないかもしれませんが、彼は彼とイスラ ムに して 声を浴びせる何十人ものキリスト教徒に し、彼自身とイスラ ムを守ったのです! 私たちが座り、不毛にも をパラパラとめくりつつどんどん怒りを沸き上げて行く一方、彼は静かに笑みを浮かべて座り、神に何か のものを べる崇 行 と、イスラ ムの について私たちに すのでした。彼は何十匹ものハイエナに まれた、一匹のガゼルのようでした。そしてその 中、 やかで、友好的で、丁 でした。そのことは、私の心に めて い影 を与えました。

そのムスリムの少年は、本棚にクルア ンのコピ を置いて行きました。忘れたのか故意にそうしたのかは分かりませんが、私はそれを み出しました。私はこの本が より理にかなっているのを て、すぐに激怒しました。私はそれをソファ に投げ て、怒りに煮え

立ってそこを去りました。しかしそれを んだ 、厄介な疑 が私の核心に首をもたげました。私はそのムスリムの少年のことは忘れ、ユ スハウスで友人たちと しい を ごそうと最善の努力をしました。若者のグル プは 末、礼 の催しのために色んな教会に出かけたものでした。そして土曜の夜はバ の代わりに、大きな教会で ごしました。私は、「泉」と名付けられたそのような催しの内の一つに参加し、神を非常に近くに感じたことを えています。私は身を低め、自分の 造主に する 情を示したくなり、自然に感じたことを行ないました。私は平伏したのです。私はムスリムが 日の祈りできるように、平伏しました。私は自分が何をしていたか分かりませんでした。一つだけ分かったのは、それが本当に心地よかったということだけです…。それは今までやってきたいかなることよりも、正しい感じがしました。私は非常に敬虔で、精神的な感 を抱きました。そして普段通り、また自分の生活を けましたが、何かはずれて行くような感 を抱き始めました。

牧 はいつも、私たちが自らの意志を神に服 させなければならない、と きました。私は本当にそうしたかったのですが、そのやり方を知りませんでした。私はいつも、「神よ、私の意志をあなたのものにして下さい。私をあなたのご意思に わせて下さい。」などという に祈りましたが、何も起こりませんでした。信仰心が 退するにつれ、私は自分が教会からゆっくりと れ出しているのを感じました。私をキリストへと いてくれたキリスト教徒である私の一番の 友が、 の私の 友の一人と一 に、私と2年 付き合っていたガ ルフレンドをレイプしたのは、この 期のことです。私は の部屋で、何が起きているのかも分からないほど っ っており、何も制止することが出来ない有 でした。またその数 、ユ スハウスの 者の男が、私の友人でもあった少年にいたずらを いていたことも明らかになりました。

私の世界は れてしまいました！私は、神から近くあり、また天国のために努力しているはずの大 多くの友人や人々から 切られていました。私は再び何一つ残っていない、空っぽの状 になってしまいました。私は以前のように に、行く当てもなく彷徨い き、ただ仕事と睡眠とパ ティ のために生きていました。また私とガ ルフレンドは、その すぐ れました。私の罪 感と怒り、悲しみは、私の全体を包み んでいました。私の 造主は

、一体なぜこのようなことが私に起こるようにさせたのだろうか？ 私はどんなに利己的だったのでしょうか？！

その少し、 のマネ ジャ が、一人の「ムスリム」が私たちと共に仕事をするようになる、と告げました。彼は本当に宗教的であり、私たちは彼の近くでは上品に振舞うように心がけました。そしてこの「ムスリム」は、やって来た瞬 から布教を 始しました。彼は私たちにイスラ ムについての全てを えることに、 を惜しみませんでした。皆はイスラ ムのことについてなど何も きたくない、と言いましたが、私だけは いました。私の魂は、叫んでいました。そして私の 固ささえも、その叫びを押し すことが出来なかったのです。私たちは一 に仕事をし始め、各々の尊重すべき信仰についても を始めました。そして私は、キリスト教を完全に めました。しかし彼が をし始めると私の信仰は急 し、あたかも自分が、この い「ムスリム」から信仰を防 する十字 士であるかのように感じました。

のところ、この特 な「ムスリム」は、私が かされていたような 人ではありませんでした。 、彼は私よりも れていました。彼は い言 も使わなければ、怒りもせず、常に温和で 切で、礼 正しかったのです。私は本当に感 し、彼を れたキリスト教徒にしようと 心しました。私たちはお互いの宗教について ね合い、行きつ りつしましたが、私は自分自身が徐々に守 に回ってきているのに 付きました。ある 、私が非常に怒ってしまったことがありました。私は彼に、キリスト教の真 を 得しようとしていたのですが、真 は彼の にあると感じたのです！ 私はどんどん混乱し始め、何をしたらよいか分からなくなりました。私に分かっていたことは、ただ自分の信仰心を高めなければならないということだけでした。それで私は に り み、「泉」へと爆走しました。私はそこで再び 祈りさえすれば、あの感 と い信仰心を取り し、その 果例のムスリムを改宗させることが出来る、と 信していました。私は 局そこに到着しましたが、道中 ばしまくってきたにも拘らず、そこは されていません！ もいかなかったのです。私は、自分を充 するための似たような催しを必死に探して回りましたが、 つけることは出来ませんでした。私は落胆して 宅しました。

私は、特定の方向に押しやられているのを感じ始めました。それで、私は自分の意志をかれのご意思に委ねるため、何度も私の 造主に祈りました。私は、自分の祈りが叶えられ始めていると感じました。 宅してベッドに横になると、その瞬、私は 去にはなかったほどに自分には祈りが必要である、と 感じました。私はベッドに座り み、こう 叫びました：「イエスよ、神よ、 陀よ、あなたが であろうと、どうぞ私を いて下さい！ 私にはあなたが 必要なのです！ 私は人生で 山の 事を いてしまいました。私にはあなたの援助が必要なのです。もしキリスト教が正しいのであれば、私を 固にして下さい。しかしもしイスラ ムが正しいのであれば、そこへと私を いて下さい！」 祈りをやめると は消え、魂の奥深くに安らぎを感じました。私は回答を知ったのです。私は翌日 仕事に行くと、例のムスリム兄弟に言いました：「君に“こんにちは”と言うのには、何と云えばいいんだい？」彼は、一体何のことだ、と ね返しました。そしてムスリムになりたいんだ、と言うと、彼は私を て、「アッラ フ アクバル（神は 大なり）！」と言いました。私たちは一分ほども抱き合い、私は彼に全てを感 じました。私はイスラ ムへの旅を始めたのです。

私の人生の中で起こった全ての出来事を振り返ってみると、私は自分がムスリムになることは されていたのだと 感じます。私は神から、 山の慈悲を示されました。私の人生で起こった全ての出来事には、学ぶべきことがあったのです。私はイスラ ムが酩酊や 法な性交 を禁止し、ヒジャ ブ（ベル）を必要とする美しさを学びました。私はようやく落ち着き、一つの方向性に定まりました。私は 度ある生活を送り、一人前のムスリムになるためベストを尽くしています。

いつでも はあるものです。それは私がそう感じてきたように、皆 方の多くもそう感じていることに いないと思います。しかしこれらの と、これらの感情的痛みを通して、私たちは くなります。私たちは学び、そして そう望むのですが 神へと立ち返るのです。人生のある地点でイスラ ムを受容した私たちは、非常に祝福に溢れた幸 々な人々です。私たちは、最も 大な慈悲への 会を与えられたのですから。神は 活の日においてさえも、私たちが しないような慈悲を授けて下さろうとしています。私は家族と和解し、自分自身を神のご意思に服 させ始めました。イスラ ムは本当に人生の手法そのもので

あり、たとえムスリム同胞や非ムスリムから粗末な いを受けても、私たちは常に辛抱くあり、神のみに立ち返ることを思い起こさなければならないのです。

もし私が ったことを言ってしまったら、それは私のせいであり、もし正しいことを言っていたら、それは神のお です。全ての 美は神にこそあります。神がその慈悲と祝福を、その高 な使徒であるムハンマドに下されますよう。ア ミ ン。

神があなた方の信仰心を深められ、それを神のご 悦を得られる形にして下さいますよう。そして神が私たちに、天国を授けてくれますよう。ア ミ ン!

この 事のウェブアドレス:

<https://www.islamreligion.com/jp/articles/456>

著作 2006-2015 断 を禁じます。 2006 - 2023 IslamReligion.com. 断 を禁じます。